

平成26年度 松江工業高等専門学校外部評価委員会議事概要

1 日 時 平成27年3月4日(水) 13時30分～15時35分

2 場 所 松江工業高等専門学校 会議室

3 出席者

【外部評価委員】

高等教育機関関係

竹内 潤 氏 国立大学法人 島根大学 理事(学術・国際担当副学長)

大庭 卓也 氏 国立大学法人 島根大学研究機構産学連携センター長

地方自治体関係

広野 正充 氏 公益財団法人 しまね産業振興財団 副理事長

地域教育関係

山根 貴史 氏 島根県中学校長会長 松江市立第一中学校長

産 業 界

今岡 克己 氏 一般社団法人 松江テクノフォーラム理事
株式会社ワコムアイティ 代表取締役

本校関係者

陶澤 真一 氏 松江高専同窓会 副会長

【本校出席者】

井上 明 校長

原 元司 副校長(教務主事)

浅田 純作 副校長(管理運営担当)

森田 正利 校長補佐(学生主事)

山根 繁樹 校長補佐(寮務主事)

岩澤 芳和 事務部長

嘉本 龍二 総務課長

坂本 英治 学生課長

4 日 程

開 会

1. 校長あいさつ 13:30

2. 委員長及び委員紹介 13:35

3. 本校出席者紹介 13:40

4. 本校における「社会との連携, 社会に向けた人材育成」の状況報告

. 13:45-14:30

(1) 社会との連携 発表者 浅田副校長

(2) 社会に向けた人材育成

教育関係 発表者 原 教務主事

学生支援関係 発表者 森田学生主事

山根寮務主事

5. 質疑応答 14:30-15:05

6. 委員のみによる意見交換 15:05-15:25

7. 委員による講評 15:25-15:35

8. 校長謝辞 15:35

閉 会

5 議 事

開 会

開会に先立ち、岩澤事務部長から配布資料について説明があり、次いで、開会に当たり、井上校長から挨拶があった。

○井上校長

皆様方、本日は3月の年度末で非常に慌ただしい中、また、お忙しい中をお集りいただきまして、ありがとうございます。本年度、山根先生に新たにご就任いただき、また、その他の先生方には、引き続きお引き受けいただきまして、ご意見を賜りますことを大変感謝しております。

本年度、松江高専は創立50周年の記念の年度でございました。同窓会、また、保護者から組織する後援会とともに、色々な50周年記念の事業を展開いたしました。各種広報とともに、学生向け、卒業生向け、一般市民向けなど、色々な形での事業・行事を行いました。これらを通じまして、松江高専としての存在感の発揮とともに、今後への期待を持っていただけたのではないかと思います。その中で、最も公式的な行事であります記念式典と記念祝賀会には、皆様方にご案内を申し上げ、ご出席を賜りまして本当にありがとうございます。色々な方々に松江高専のことを改めてお知りいただき、また、松江高専に対する期待感を私どもなりに感じた次第でございます。今後ともこれを機会に、次に向けて進化していけるよう自覚していきたいと思っています。

本日のテーマであります、「社会との連携、社会に向けた人材育成」ということで設定をいたしました。これにつきましては、特に先々代の宮本校長のころから、推進を強化し、そのスタンスを現在も継続している状況であります。

その中で特に産業界との関係であります、象徴的なものといましては、松江テクノフォーラムの存在がございます。これは、松江高専と特に産業界の連携を図る組織でありまして、現在では一般社団法人の形態をとっています。全国の高専には、それぞれこのような連携組織がありますが、このような形での組織形態をとっているのは、まだ、あまり存在しない状況になっています。

それから、松江高専の機能を産業界との関係でどのように生かしていくかということについては、色々な場面があります。例えば、製造業の関係で人材育成事業をしているということも、その一つではないかと考えています。

また、広く地域社会への貢献という側面では、小中学生を対象とした、科学に興味を持ってもらう体験を行う講座も広く展開しています。

行政との連携の側面になりますと、島根県との包括的な連携協定を8年前に結び、特に産業振興との関係で、高専の地域共同テクノセンターと関係しながら、県職員の方をコーディネーターとして位置付けていただいて、色々なことを連携して実施しています。また、県の関連法人としてのしまね産業振興財団には、具体的な事業を担当していただいております。その資金提供により、先ほど申し上げました人材育成事業のほか、技術シーズの育成やその事業化などについてもご支援をいただいている状況です。なお、自治体との関係につきましては、産業振興に限らず色々な側面があるわけですが、松江市とも連携協定を結ぶ話があり、近々締結する予定となっております。

地域産業との連携に話を戻しますと資金提供を受けながら展開する企業との共同研究、あるいは受託研究については、全国の高専の中で松江高専は割と上位に属するような金額を得ています。

それから人材育成の側面では、学生教育を通じた機能の発揮は、当然に重要なことであります。現況で申しますと、近年、入学してくる学生の学力層が非常に幅広くなっておりまして、それに対応しながら、しっかりとした教育で力を付けさせるということに意を注いでいます。学生を伸ばさせていくことにつきましては、私どもなりにかなり努力をしておりますし、学生もがんばってくれて、この点について松江高専は全国の高専の中でも高く評価されてよいと自信を持っているものであります。また、学生教育と地域との関連で申しますと、地域社会の方々、産業界の方々に担当していただく授業を継続的に行っているということもあります。一方学生の自主性を育む観点から、学生の諸活動や寮生活を通じた、人間性の向上も図っている状況であります。今日は、その辺りのことも含めて説明致したいと思っております。それでは皆様どうぞよろしくお願いいたします。

議 事

○委員長の選出

岩澤事務部長から、「委員長の選出については、本委員会規則により委員の互選により選出するという事になっているが、昨年に引き続き島根大学理事の竹内先生にお願いをしたいがよろしいか。」との提案があり委員の了解を得た。

○竹内委員長

それでは僭越ですが、ご指名によりまして、進行役を務めさせていただきます。本日はよろしくお願いたします。

引き続き、委員長及び委員の自己紹介、学校出席者の紹介、竹内委員長からの日程説明があった。続いて、本校における「社会との連携、社会に向けた人材育成」の状況報告が、資料に基づき、下記の発表者から説明された。

「社会との連携」 浅田副校長（管理運営担当）から説明

「社会に向けた人材育成」

教育関係 原 副校長（教務主事）から説明

学生支援関係 森田校長補佐（学生主事）から説明

山根校長補佐（寮務主事）から説明

松江高専の説明後、意見交換及び質疑応答があった。

○竹内委員長

これから質疑応答に移ろうと思いますが、ご質問はございませんでしょうか。

○広野委員

今、ご説明を聞かせていただきまして、校長先生や先生方が、生徒さんの勉強だけでなく、人として総合的な完成できるような教育がされているというのも良く分かりましたし、地域・社会との連携についても教育をされて、成果が出ているのかなということを感じたところでございます。

私どもの産業振興財団との関係は、中でもお話をいただきましたように、共同研究、受託研究のところで、人材育成、所謂講座と言いますか、セミナーのほうでお世話になっております。共同研究、受託研究につきましては、シーズの企業化のところで3件高専さんに事業を実施していただいておりますが、これはうちの財団にとっては大型の研究をなさっていただいております。しかし、残念ながら今年は小型のシーズ育成で、3件申請をいただきましたけれども、審査会のほうで結果的に採択が0だったというところがございます。私も気になったので聞きましたら、少し研究的な要素が少ないのではないかとこのところが採択ならなかった要件のようで、是非この件につきましても、高専さんに頑張っていたきたいなと思っております。

この島根におきましては、工科系の高等教育機関と言いますか、高専さんと島根大学さんがございまして、都市部と違って、二つの中の一つでございまして、是非高専さんと私どもの財団も一緒になってもっとやっていきたいなと思っておりますし、新聞等でご案内のとおり、来年度、IT系のソフトウェアの研究開発拠点事業を私どもの財団が事務方をやっていくということで、予算が付こうとしています。

それらの事業でありますとか、それから、ヘルスケアビジネス事業につきましても是非高専さんと一緒になって取り組んでいただきたいなと思っております。

一つ教えていただきたいのですが、就職活動の時期の繰下げがあって、今年が最初の年ではないかなと思っておりますが、県内企業さんは人材の確保が難しい、優秀な人材を確保したいという思いをお持ちになっているわけですが、高専さん自体にとっても就職率は非常に良いわけで、県内だろうが県外だろうがということがあるかもしれませんが、私どもとしては是非県内の企業さんという思いがしている中で、どうしても短期決戦になると、時期が学業の忙しい春、夏に重なってしまいます。なかなかその辺りのことが県内の企業とマッチングできないというところで、県外に行くのかなと思っております。テクノフォーラムさんで色々やっていただいていると思うのですが、そこらも含めて、特にこの変わる時期におきまして、何か一工夫していただいているのか、あるいは一工夫したいと思っておりますのか、その辺りのことを思えば、優秀な人材を県内企業さんに是非ぜひという思いがございますけれども、いかが

でしょうか。

○井上校長

今年から就職活動の時期がずれるということで、特に県内企業との関係で、苦慮する状況もあるのは事実です。

学校が企画して、学生と個別の企業との直接の対話の場を設けるような場面が、例年ですと1月2月中にできました。それはちょうど授業期間中でしたので、学校が学生に参加させるという形で企画することもできたのですが、今年は3月以降でない学校が企画する形ではできにくい状況になりました。それで、初年度で周囲の状況も未知数の中で、やむを得ず4月に行うという形にならざるを得ませんでした。仮に学生が休みの期間にそのような場を設定しても、どこまで参加が見込めるかということも問題になりました。

一方、県内に「こういう企業がある」、「こういう良い会社がある」、それから「中央の大手に行くのはまた違った面白さがある」というようなことについては、折に触れ、学校から学生に対して話をしておりますし、また、「地域社会と産業」の授業の中で、県内企業を良く知る、また、県内を回っておられるような方々、それから県内企業の方から、直接「このような企業がある」、「このような特色ある製品がある」、「このような特色あるサービスをしている」ということを紹介してもらい、学生がそれに対してレポートを書くということを通じて、学生の意識を高めているつもりであります。

その一環として、例えば、県西部地区について、この前、授業に益田市長にお出で頂き、その中で、業界の研究をするということで、学生に対して関係企業の人からそれぞれお話をいただいたりしています。さらに、個別にその地区の出身の学生に対して、学校の外で行政が企画して企業参加の下行う催しについて、その参加を学校から紹介したりもしています。時期的な問題で学校が直接企業との接触の場を設けることについてなかなか難しい面がありますけれども、工夫しながら行っている状況であります。

○浅田副校長（管理運営担当）

補足すると、例年2月にやっていた企業説明会ですが、来年度は4月17日に説明会を行う予定にしておりますし、また、地域インターンシップを奨励するようにしております。また、学科ごとに現場見学会や企業見学会等の企画を立てて、色々なところを見学させていただいたりしています。

今、校長が申したように、我々もどういう影響が出るかというのが、確かに未知数ですので、できることを追求しながら、まだ初年度ですので、どういうことになるかというのは色々研究したいと考えております。

○井上校長

率直な話、大学と同列に高専を扱って、このような日程設定をすることについては、多少私どもとしては違和感があるのは事実です。

○原副校長（教務主事）

県内企業さんについては、関東や関西の企業さんから3ヵ月くらい求人への指示がずれているということがあって、むしろ8月に戻していただくと、割と同じ土俵に乗る可能性は、もしかしたらあるのかもしれない。時期が少し近いほうが学生にとっては、その選択肢をどうしても早く決めたいという意識が働いてしまうので、そういう点も少し様子を見なければという感じだと思います。

○広野委員

学生さんが学業にできるだけ優先して取り組まなければいけないということで、ずらされたのではないかと思いますけれども、それだけ高専としても動きにくいということも良く分かりますし、そうするとテクノフォーラムさんや、県や市や業界団体等と一緒に汗をかいて、この新しい動きに対して、先ほど私が申しましたように、どうしたら優秀な人材を県内企業さんへということができるとかということを、またご一緒に考えてみたいと思いますのでよろしくお願いたします。

○竹内委員長

他にいかがでしょうか。

○今岡委員

ワコムアイティのほうでも、毎年高専の学生さんに受験をしていただいて、非常にありがたいと思っております。今日のお話を聞いて、本当にこのような素晴らしい環境の中で育った優秀な学生さんを迎えることは、地元の企業としては本当にありがたいと思っております。

色々なことがあるのですが、例えば島根大学さんを中心として、私が言うことではないかもしれませんが、鳥取、島根の5大学が中心となって、ソーシャルスキルをアップさせるための社会体験をやっておられます。これもやはり文科省の事業だと思います。これは何かと言ったら、私たち民間企業が受け入れているのは、今まではインターンシップという制度でした。ですから、就職を前にした4年生ぐらいの学生さんたちを迎え入れて、「うちの会社はこういう仕事をしています」と言いながら、企業としては学生さんを事前に見て、「この子良いな」と言って唾を付けたり、学生さんも就職というものを目の前にして受け入れるというような制度です。

ところが今回、島根大学さんが中心となってやっていらっしゃる社会体験というのは、大学に入って1年生、2年生という、これから4年、5年に向けて本格的に勉強しなくてはいけない学生さんたちの学びに対するモチベーションアップ、要するに社会に出てどんなことを自分たちがやっていくのかということを確認するためのものです。

ですから、私、教育委員会の委員長もやっており、そこの中でお手伝いをさせてもらっているのですが、1年生2年生と言っても、本当にどうなるか分かりません。しかもうちみたいなコンピューターの会社に、文科系や教育学部の学生さんたちも来ます。ですから将来、「絶対うちの会社に来ないだろうな」という子どもも来ます。それは私たち民間企業としても非常に面白い発見でした。

要するに就職相手ではなく、まるで自分の娘や息子のような子どもが、どういう社会人になっているか、その手助けをする役割としての企業という意味での会社の姿勢が変わったということと、学生さんたちに色々なことで、自分が将来行く予定ではない、色々な企業を体験できるという点で、非常に面白い経験をしました。これは、今やっている最中です。

こういうことを松江高専さんでもチャレンジされてみてはどうかと思いました。「1年生、2年生ですけど、受け入れてくれませんか」というように。それは民間のテクノフォーラムだけではなくても、地元の企業は喜んで受け入れる素地があるかと思いますが。また、そういう子どもたちは、地元の企業を発展させるチャンスにもなるかと思いますが。是非、そのような事例を聞かれながらチャレンジされたらどうかという提案をさせていただきました。

○竹内委員長

ありがとうございました。

○井上校長

大学1年2年ということになると、高専で言うと年齢的には4、5年生になります。おっしゃっている趣旨としては、必ずしも就職活動ということではなく、その前段階の社会経験のようなことだと思います。そうすると、私どもで言いますと、下の学年の1、2、3年生ということになるかもしれませんが、そういうものも対象になりますか。

○今岡委員

なると思います。やはり高専1年生2年生のときは、多分この5年間の高専生活を見たり、あるいはその専攻科も含めて見ていると思います。これからの自分の高専生活というの、そのときに将来、その次のことを見る、見させるということがとても意味があると思います。

○陶澤委員

歴代の校長先生も地域・社会の関連というものが必要になるので進めてもらいたいということで、非常に良いなと思っております。私自身、高専のときはひたすら勉強というのでもあって、高専の中でモグラのような生活をしていて、勉強はしっかり詰め込んだのですが。進路を検討するとき教授の方から、「こういうところにこういう良い会社があるんだが、そこはどうだ」、「じゃあそこに行きます」みたいな、そういうことだったので、今日の事例の中にある色々な企業や社会、教育関係のもので色々なインターフェースを整えてきているということがすごく良く分かります。

企業説明会も就職を間近にということの良いことかなと思いますけれども、先ほどもおっしゃっていましたが、学生は多分、ほとんど企業のことは、在学中は頭に入っていないのですが、こういう企業説明会の多くは1年とか2年とか3年ぐらいの若い年度のときに、「その企業がどんなことを考えているか」、「この企業はこんなことで困っている。じゃあ僕だったら、こういうことをやってみたい」など、そういったことが学生の5年間の発達のプロセスの中で少しずつ地域社会のことが分かって、「じゃあ自分はどうしよう」みたいなことに繋がっていくようなインターフェースを繋げて理解していただければ、私みたいに、「すごく良い会社があるから行ったらどうか。はい行きます。」みたいな形にはならないと思います。それも良かったのですが、そのようにはなりません。

また、将来自分が会社に就職してからも、学校に行っても活躍していこうという姿勢を持って卒業へという意味ではないかなと思います。要はたくさん作っておられたインターフェースを計画し、順次生かしていただけたら良いかなと思います。

○竹内委員長

今の話に関連して、企業との間の情報を貰って、説明会や取り組みというのは対象としては何年生ぐらいからですか。1年生から色々な形で繋がりを作っておられるのか、就職が近づいて情報が直接欲しいような時期から入れておられるのか、どの辺りから参加しておられるのですか。

○浅田副校長（管理運営担当）

先ほどの社会と産業の授業であるとか、インターシップ、企業説明会などは4年生からやっています。ただ、現場見学会や企業訪問、工場見学などは低学年からやっています。

○森田校長補佐（学生主事）

3年生からエントリーシートを書かせるなど、より具体的なことをさせています。工場見学は低学年からです。就職のエントリーシートは3年の研修からしています。

○原副校長（教務主事）

3年の研修で就活まではいかなくても、将来の考え方といったような社会教育に繋がるような講演会はしています。

○竹内委員長

それは授業の一環としてされているのですか。あるいは希望者だけ集めてという形ですか。

○原副校長（教務主事）

3年生全員に対して、授業で。

○竹内委員長

他にありますか。

○大庭委員

色々とお話を伺わせていただいて全体として感じたのは、学生が自分のこととして参加されているなという感じを持ちました。

学生の組織が40名、1クラス以上という話でしたし、先生に言われたからということではなく、自分の意識でやっていることはすごく大切なことだと思います。社会に出るといことは、それは自分の責任になりますし、社会を良くすることに繋がっていくと思いますので、とても良いことだと思います。

少し教えていただきたいのは、「逆境力」という話がありましたが、学生は順調にいつているときには何も困らないけれども、若いときに挫折を味わったほうが社会に出たときにどうリカバーしていくかといった力が付くのではないかと最近思っていて、そういう人のほうが成功すると思います。

それで「逆境力」にすごく興味があったのですが、どういったことをされるのか少し教えていただきたいです。

○森田校長補佐（学生主事）

昔は部活動で厳しいことをやって、それを乗り越えていけば逆境力が付くという意識がありましたが、今の子どもたちはそれが無いので、さてどうしたものかと思っていて、昔のようにやれば良いかと言うと、昔のようにはいきません。少し勉強をさせてもらったところで言うと、うちの部活もそうですし、コンテストでもそうですが、行き着くところで言うと、子どもたちが逆境力を高められるというのは、きちんと誰かに見てもらいたいとか、評価してもらいたいとか、自己肯定感、優良感に繋がるのですが、失敗はしたけれども、そこを誰かにフォローしてもらいたい、見てもらいたいということが大事です。

結局、部活動をやっていればOKではなく、部活動に関わって、大人や指導者に教えてもらって、それでも上手くいかなくても、最終的に何か満足できるものがあったり、達成感があったりというところで養われていくと言われたときに腑に落ちたところがありました。結局放り出してはいけなくて、見てあげて、その中で色々なチャレンジをしたり苦勞をしたりすることで今の子どもたちは少しずつそれが養われるのではないかとあります。

高専生の中には運動部ではないがロボットが好きでコンテストに出たりしています。そこでも一緒にことが起きるので、自分の持ち場で同じようなことができていけば良い。私たちとしては、そこをサポートして見てあげて、色々なことをアドバイスするなり、ときには突き離すことも必要ではないかと思っています。

○山根委員

小学生や中学生を対象とした色々な活動をしておられて、時折チラシも見るのですが、今日まとめて聞いて、色々な活動しておられるなど感じました。テクノ関係の活動や学校開放事業、一中は夏休み中に受入講座としての工作教室活動でお世話になりました。そういった活動をされて、子どもたちが科学のほうに目が向いて、成果が上がって、そういう経験をした子どもが高専などを受けていくのですか。そういう感覚をお持ちなのかということ。

それから、私は松江一中ですので校区となります。子どもたちは高専を目指してがんばっています。その中で合格をした子どもはやはり幅があります。その辺りは高専生だけではなくて、他の高校に合格した子どもにも幅がありますが、上手く全体を上げていくコツみたいなものがあれば教えていただきたいです。2点お願いします。

○原副校長（教務主事）

1年生に対して松江高専の学校開放を経験しておられるかというアンケートを取りましたが、すごく少なかったです。ただ、そのアンケートは別の意味で、中学校時代にRubyを経験した子どもが何人かを調べたくて、ついでに聞いてみましたところ、経験者は12.5%くらいいました。学校開放のところはオープンキャンパスなどが混ざっている回答で、学校開放の回答がきちんと取れていなかった。ただ、結構な数はいると思います。

○浅田副校長（管理運営担当）

入学者に聞くと、オープンキャンパスには皆さん参加されています。

○森田校長補佐（学生主事）

工作教室は倍率が高くて、希望しても撥ねられることがあって、僕らも優先されませんので落とされ続けています。

○浅田副校長（管理運営担当）

定員に対して3倍の応募があります。

○井上校長

オープンキャンパスでも色々な体験を設定しています。

○原副校長（教務主事）

うちの学校に入ってくれるのは嬉しいのですが、興味を持ってくれるほうが最終的には巡り巡ってよいのでは。Rubyに関してはうちがやっているわけではなく、松江市や島根県が回り回ってきていると

いうところで、そういった地道な活動のほうが意味があるという気がしています。はっきりとわかりませんが、けっこうな人数がいると思いますが、きちんとしたデータは取れていません。

○井上校長

「科学の縁結びまつり」では学生が授業科目の一環としてそこに参加をして子どもたちに教えます。学生は事前の授業での指導に基づきイベントでは自分たちが子どもに教えます。

学校開放事業などに参加した子どもたちの中には、将来高専を目指す人もいます。ただ、これらの事業では、単に高専を目指してほしいという意味だけで行っているものでもありませんので、もっと広く、科学や理工系に興味を持ってもらいたいという考えがあります。

○原副校長（教務主事）

学力の幅があるということで、実は他の高専の学力が落ちていく例を見せましたが、かつてはうちの高専も中弛みということで、意欲を失って学力が落ちたり、学校が好きでなくなるという現象がありましたが、3年生までを高校生と同じような指導をしていたら、そういったことがなくなってきました。途中で気力を失う学生の割合が少し減ってきているというのと、創造演習のような色々なことをやって、「ものを作ることが楽しい」という教育をある程度積極的に取り入れることで、受験のための勉強ではなく、ものを作ることに興味があるという子どもを増やしていることの効果が出てきていることが原因ではないかということと、ある程度教員側が手を掛けるようになっていきます。昔は入ってきたら大人扱いということで、「自分で勉強をしなさい」というようになっていたのが、補習などで手を掛けて、教員側も努力をしているというところもあると思います。

実は入試で良い成績で入ってきて落ちこぼれないのかと言ったら、そうではなく、モチベーションを維持して机に向かえるかという、中学生時代に勉強をしなくても点が取れる子どもというのは、試験勉強を全くしないで一番が取れる子どもはいるのですが、うちでそれをやると間違いなく留年をします。そういった意味で実は成績ではなくて、モチベーション、ものづくりに興味があるかが重要です。入試成績と最終的な成績は相関がなく、ほとんどオール5で入ってきて留年する子どももいれば、ビリで入ってきてよい成績で出ていく子どももいます。成績が良いからどうこうということはなさそうな感じですか。

○井上校長

一般的な話になりますが、島根県の子どもたちは高校段階に入ってから学力が伸びる可能性を持っていると思います。特に進学校を中心に学習意欲を確保するための努力が行われ、全国の一般的な傾向と比べると島根はより成績が伸びていく傾向があると思います。

他県に比較すると、高校入試における競争が過度ではないということもあるのかもしれませんが、高専入学後にきちんと学習意欲を喚起し、学習習慣をつけることを指導すれば、伸びしろは大きいと感じています。

○竹内委員長

予定の時刻になっています。ここで質疑応答を終了させていただいて、別室で委員の間で意見交換をさせていただきます。全体の講評とさせていただきます。

委員のみによる意見交換が、小会議室で行われた。その後、委員による講評があった。

○竹内委員長

それでは再開させていただきます。最初は私から講評と一言感想を述べさせていただいて、補足があれば委員からお願いしたいと思います。

まず本日のテーマとして、「社会との連携、社会に向けた人材育成」ということでしたが、この観点から言いますと本当に素晴らしい取り組みをなさっているということに、委員の皆さん全員が感心しています。

特に今回のテーマについては、学内での地域共同テクノセンターと、高専との繋がりを持って進めておられる松江テクノフォーラムとが高専と地域を繋ぐ大きな枠組みになっていて、その間での連携事業が非常に上手くいっているという印象を持ちました。

皆さんもおっしゃっていましたが、高専の学生さんの場合には、将来像、アウトカムが明確に設定されているということが大きいと思います。それに向けて様々な取り組みが非常に上手くいっていると思います。テクノフォーラムに入っておられる企業との技術交流による地域への貢献であるとか、講座を開講し、インターンシップを通して人材の育成をされている。さらに、そのことを通して高専自身も色々な形でレベルアップされているというような非常に良い循環になっていると思います。

そういったものを通しての社会へ向けた人材育成ということでは、教育面につきましても非常に高い教育力を持ち、アウトカムがしっかり設定されていて、色々な取り組みをやっておられるからだと思いますが、高い志願者率を確保されており、入学後に非常に大きな学力の伸びがあるということについても大変感心いたしました。

教育においても、地域との連携でテクノフォーラムとの色々な形での共同事業に特色があると思いました。産学連携を通しての授業、卒業研究、インターンシップ等、教育面でも社会との繋がりを上手くやっていらっしゃるという感想を持ちました。

教育の課題でもありましたように、全国の高専でもそうだという説明がありましたが、コミュニケーション能力、リーダーシップ、プレゼン、語学力はデータを見ても引き続き課題として残っているということで、社会に出てからのことを考えると、その辺りのところも引き続き、色々な取り組みが必要だと思います。

それに関連して委員の皆様もおっしゃっておられるのは、このような課題にも、地域との連携の下で色々な取り組みをすることが解決に繋がるのではないかとということです。つまり、地域に出掛けて、色々な形で地域から学ぶと言いますか、企業や社会と色々な取り組みをする中で、学生は色々なことを学んでいくのではないかと。更に語学にしても、例えば海外のインターンシップみたいなところがあれば、そういったところからも学ぶことができるであろうし、学内だけで課題を解決するよりも、むしろ地域との連携の中から課題についても取り組まれたら良いのではないかとということです。以上を総評とします。

また、今後は島根大学との連携も是非深めていただきたいと思います。色々な形で島根大学のことも見て知っていただいて、同じ松江の中での2つの高等教育機関として両校の間で色々な連携が深まれば良いと思います。それも両校の連携だけではなく、本日のテーマでもありますが、地域との連携の中での取り組みの中で、一緒になって何か取り組めればと思っています。

あとはそれぞれの委員の方から補足をいただければと思います。

○陶澤委員

先ほども触れた課題のところ、高専生の弱みについて、普通一般に大学に比べて、高専生のリーダーシップがないところがある。更にも増して、松江高専はもっと悪いという図表の形になっている。まだまだと言われていました。現実にもその地域性としても低いので、自分の経験からしても、松江高専の学生というのはコミュニケーション能力もリーダーシップも打ち出しづらいと思っていますが、今日お聞きした中でも、学習や学生会の活動や授業の活動を見ていると、卒業して5年、10年経ったら、今の高専の教育の中で得たものをベースにしてあるのか、きちんと自分で課題を認識して目標を持って、じわりじわりでも実勢を發揮してやっていけるような学生になってきていると思いますし、5年後や10年後には職場を支える中核的な人材、なくてはならない人材になってくれるのではないかと、今日の説明を聞いてこの先も期待しても良いという気がしましたので感想とさせていただきます。

○今岡委員

私も一言あります。うちの会社ができる22年になりますが、その間高専生に来ていただいています。本当にうちの会社の中核を担っています。

松江高専を出られて、皆優秀な即戦力で活躍をしていますが、経営者への教育はエンジニア教育と違うものがあると思ったりしますが、少しそれが残念に思います。

是非そういう点での先輩を見なくてはいけないかもしれませんが、高専を卒業した経営者の方たちを招いて、学生たちに刺激を与え、企業家精神やリーダーシップをとって、是非指導してあげてほしいと思いました。

○竹内委員長

以上で議事を終了させていただきます。ありがとうございました。

○学校出席者

ありがとうございました。

閉 会

閉会に当たり、井上校長から挨拶があった。

○井上校長

本日は、熱心に、また詳しく御検討いただきまして本当にありがとうございました。社会との連携については、今後も変わらぬ課題であり、今回色々ご指摘をいただきました。また、学生教育の関係では、幅の広さについてのお話もいただきました。今回のテーマは、特に地域社会の中で、高専にとって非常に重要な要素となりますので、これからも講評いただいたことも踏まえながら、学校運営について尽くしてまいりたいと思います。

本日はお忙しいところ、誠にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

平成 26 年度松江工業高等専門学校外部評価委員会を終了